

レトモ只統計上ニ現ハレタダケノコトカ、今審カニスルコトガ出来ナイ」と、沖縄の乳児死亡率の精度については判断を保留していた。

しかし、1960年発表の1921-25年分「Prefecture Life Tables 1921-25」では、「As the report of infant deaths in Okinawa was probably very incomplete, the life table for that prefecture was unreliable and excluded in this discussion.」と、沖縄の乳児死亡率の低さは死亡届出が不完全なためであると述べていた。1961年刊行の「府県別生命表集1921-1956」にも同様の記述があった。また、1957年の水島の論文には、「但し沖縄は戦後の統計から除かれているし、戦前は乳児死亡率が異常に低く、それは届出の不完全によると思われるので、ここには除外する。」と述べられていた。

一方で、1921年～1925年分の府県別生命表は、1960年の公刊より前に、何らかの形で出回り、作製者水島自身の解釈に反する形で、琉球政府に

よって伝統的長寿の根拠として喧伝されていた。

以上の刊行経緯から、1921年～1925年分の府県別生命表は、一連の論文等の刊行経緯から、第二次大戦以後1954年以前に作製されたと推測でき、生命表作製方法の変遷もそれと矛盾しない。

第二次大戦前に作成された2回の府県別生命表では、沖縄の乳児死亡率等について、それに基づいた記述は避けながらも信頼性については判断を保留していたが、1921年～1925年分の府県別生命表の作製以降は、沖縄の乳児死亡の届出が不完全として、1926-30年分と1931-35年分も含めて分析から除外していた。

このような経緯で作製され、水島自身が論文中で分析から除外した、第二次大戦前の沖縄の生命表に基づいて沖縄を「伝統的長寿県」とする議論は、根本から見直す必要があると考える。

(平成27年5月例会)

書 評

米沢市医師会・米沢市上杉博物館 編 『米沢藩医 堀内家文書』

18世紀後半、名君上杉鷹山の実学志向と学問奨励を契機として、出羽米沢の医学研究は飛躍的な発展を遂げる。その中心的な役割を担った堀内家の貴重な史料群は2011年7月、同家から米沢市へ寄贈された。今回、軸物をのぞく書状類全314点の翻刻が成り、本書の形で刊行に至ったことは、必ずや医学史研究にとって大きな進展となるであろう。まずは、関係者の労に敬意を表する。

堀内家文書の総括的研究の端緒は、1960年代末にまで遡る。堀内淳一氏からの依頼を請ける形で、小川鼎三氏・大鳥蘭三郎氏・大塚恭男氏・酒井シヅ氏・片桐一男氏を加えた計6名の共同調査が立ち上げられた。その成果は『日本医史学雑誌』（第18巻第1号、1972年3月）掲載の特集「堀内家文書の研究」として世に問われ、片桐氏による書

状の翻刻が11回（本誌第16巻4号～第23巻4号、1970～1977年）にわたり、断続的に掲載された。

今回の刊行は「図版篇」「解題篇」二分冊の形態をとっている。利用の便に配慮され、図版と翻刻の対照は容易である。

「図版篇」（120頁）は、書状・史料併せて185点のカラー写真を収載する。編者による選定の方針は「凡例」に明示された。尚々書の一部、文字が微小になったのは仕方ないとしても、図版は鮮明で、書き手の特徴ある筆跡や墨の濃淡を含めて、十分に当時の雰囲気を感じることができる。

なかでも目を惹くのは、堀内忠意が師杉田玄白・大槻玄沢に宛てた8点の書状である。忠意が送った手紙をそのまま返書として使い、あたかも文章を添削するかのよう、行間へ朱書を添え

る。応答が長文に及ぶ場合には、別紙を付す。この種の形は医家以外の書状でも珍しいように思うが、忠意との親密な関係ゆえか、または迅速な情報交換を意図した師の配慮であろうか。

「解題篇」(208頁)は全点の翻刻・分量・注(「第二部」)に加え、堀内家歴代の履歴・活動を簡潔に整理した「第一部 堀内家文書を読むに先立って」と「第三部 米沢の蘭学」を収載する(片桐氏の執筆)。なお、第三部は別に同氏『伝播する蘭学 江戸・長崎から東北へ』(勉誠出版、2015年)として公刊された。

堀内家文書は易庵・忠意・忠龍・忠亮の四代、およそ天明期から幕末(嘉永・安政期)頃の来状を主体とする。他に、家族間の書状や漢詩・家伝方・誓誠・門生譜、明和期の解体所見と推定される「手足骨節之図」を含む。いずれも米沢医師の活動・交流の実像を知り得る好素材であり、今後の詳しい分析が俟たれる。

書状という史料は、当事者間で共通の理解が曖昧に記される例も多いので、固有名詞や物品名の判読には、大変な困難がともなう。「第二部」翻刻編は十分な注を付すが、未解決とされたままの点も多い。内容や時代背景、社会状況などの解釈は、むしろ読者自身が慎重に取り組んでいくべき課題であろう。

さしあたり書状の端々からは、堀内家歴代を取り巻く人的関係の圧倒的な重厚さを感じとりたい。たとえば、津軽藩の産科医である樋口道泉の書状(第37～39号書状)は、学問上の交流を越えた親密さに溢れている。藩医が江戸で求められた役は、平時は産科・小児科の需要が大きいはずで、忠意が修得した知識・技術の内実や津軽との交流の実態は是非、追求したい論点である。

他にも注目すべき記述は枚挙に遑がない。忠意は猿の解剖実験に携わったようであるし(第28号)、坪井信道が婦人の病症と処方とを詳述した書状(第95、96号)は、年少の忠亮にあたかも教えを乞うかの如き空気である。また、キナ塩(キニーネの結晶、抗マラリア剤)の入手ルート情報(第181、183号)など、薬材調達上の繋がりや交流の基軸といえるファクターだが、本書中の随所に類例

は散見される。薬剤名の総覧が出来れば面白い。

瞥見して本書の収載する書状の差出人は、過半が在江戸の医師・文人かとみうけられる。かたや同役中(米沢藩医)とのやりとりがあまり残されていないのはなぜか、といった素朴な疑問を感じた。むしろ最先端の知識・技術、学界動向に触れる意味でも、江戸とのチャンネルは是非とも緊密に維持すべきであろう。もとより藩医の役として江戸詰が要請される事情を鑑みても、18世紀後半以降の堀内家歴代が、江戸への眼差しを強く担保したことは、至極当然の成り行きといえる。

史料集の刊行は読者に精読の機会を提供し、読みや注記・解釈の妥当性を問うて、議論を鍛えることにこそ意義がある。評者も今後さらに収載された書状の精査を進めたいと思うが、現時点での強い印象は「江戸藩邸」という当代独自の機関が果たした役割である。藩邸は米沢医界の出先機関、活動拠点として江戸医界、そして多種多様な人的ネットワークの交流を実現する核となった。「江戸～米沢」の連携、さらに京都・長崎との結びつき(第67号、津江栢寿書状など)も念頭に置きつつ、米沢医界が最新の(西洋医学を主体とした)知識・技術をどのようにわが物とし得たか、書状の精査を通じて、あらためて熟考する必要性を痛感した次第である。

惜しむらくは、本書が500部余の限定刷で原則、非売品という現実だろう。山形県下を中心に、東北各県の医師会・主要図書館・大学や、医学・蘭学関係の史料を所蔵する一部博物館に寄贈されたとの話だが、現時点では容易に入手できない。本書収載の書状群は地方医界の記録という枠にとどまらず、どれもが近代医学形成期の具体像を顕著に示す。是非、味読の機会を得られたい。

ところで、本年9月19日より11月23日まで、米沢市上杉博物館にて特別展「米沢藩 医家の系譜～堀内家文書を中心に～」が開催中である。堀内家文書をはじめ現存する医家の諸史料が一同に介し、壮観である。上杉鷹山の見先性と絡め語られることの多い、米沢医界の独特な展開に接する好機として注目される。

(海原 亮)

[一般社団法人米沢市医師会, 〒992-0039 山形
県米沢市門東町3-3-17, TEL. 0238(23)0386,

2015年3月, A4判, 図版篇120頁, 解題篇208
頁, 非売品]

書籍紹介

真柳 誠 著 『黄帝医籍研究』

真柳誠氏は現代の中国伝統医学史研究を牽引してきた研究者であり、とりわけ漢字圏の古医籍の研究において多くの成果をあげられている。氏の中国医籍研究書が昨年11月に上梓された。

本書でいう「黄帝医籍」とは、書名に「黄帝内经」を冠する『素問』『針経』『霊枢』『明堂』『難経』『甲乙経』『太素』をいう。いずれの書も中国伝統医学の重要古典であり、特に針灸医学においてはその典拠の根幹をなす書である。

各書の歴史についてはこれまでも研究が重ねられてきたが、未解明の部分も多く残されている。本書では各書の史的問題、すなわち「版本系統が問題の『素問』、伝承史が問題だった唐代までの『九卷』『針経』と宋代以後の『霊枢』、旧態がよくわからない『難経』、成書年代と現存本の来歴が問題だった『甲乙経』、成書も伝承史も不明瞭だった『明堂』『太素』など」について、これまでの真柳氏の研究成果に新出資料を多く取り入れ、書誌学を基本として人文科学諸分野の手法と成果を用いて解決に取り組んでいる。

従来の「黄帝医籍」研究を大きく進展させた書であり、今後、中国伝統医学を研究する上では必読の一書である。

内容

序 説 黄帝医籍

第一章 『素問』

第一節 序論

第二節 北宋版

第三節 南宋版

第四節 金版

第五節 元版

第六節 明版

第七節 総括

第二章 『針経』と『霊枢』

第一節 序論

第二節 宋代までの伝承

第三節 北宋・元祐本『針経』

第四節 偽経の『霊枢経』九卷

第五節 南宋・紹興本『霊枢』

第六節 現『霊枢』の諸本

第七節 総括

第三章 『難経』概説

第一節 概要

第二節 成書

第三節 伝承

第四節 版本

第四章 『甲乙経』

第一節 概要

第二節 成書

第三節 伝承

第四節 現存本

第五節 結語

第五章 『太素』

第一節 概要

第二節 成書

第三節 伝承

第四節 現存本

第五節 総括

第六章 『明堂』

第一節 概要

第二節 原『明堂』の成書と旧態

第三節 原『明堂』の孔穴配列と経脈循行の概念